

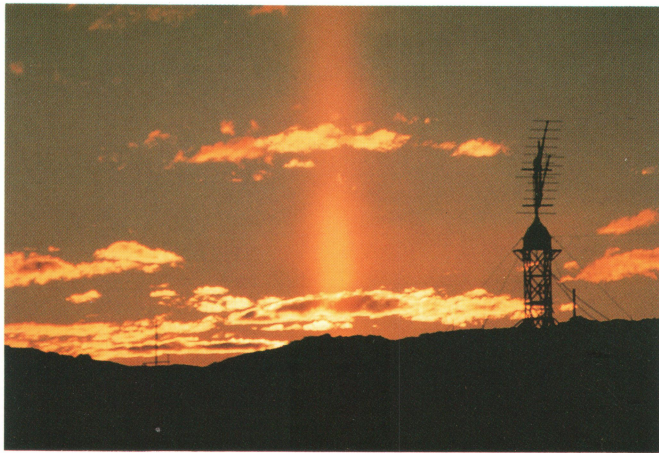


写真1 昭和基地の太陽柱（提供：宮本 仁美氏）



写真2 昭和基地のハロー（提供：塚村 浩二氏）



図25 双鳥の負ふ日と月，骨匙，餘姚河姆渡

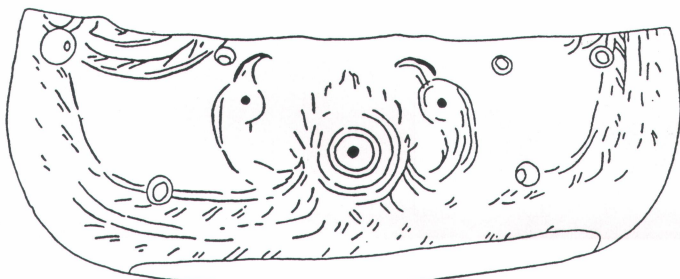


図26 双鳥の負ふ日ないし月，象牙飾板，餘姚河姆渡

林巳奈夫博士による中国古代史上の「かさ現象」に関する論考*

荒 生 公 雄**

本誌「会員の広場」に、近年2件の「かさ現象」に関する興味深い記事が掲載されている(浅野, 1988; 増田, 1989)。最近、筆者も「かさ現象」と奇遇とも言える極めて珍しい出会いをしたので、そのことを紹介させていたきたい。

筆者の場合は、現象そのものに関する報告ではなく、考古学に関する論文との出会いである。その論文とは、林巳奈夫博士(京都大学名誉教授: 1991)が史学研究会誌「史林」に著された「中国古代における日の量と神話的図像」と題するものである。筆者(1985)が辞典で分担執筆した「かさ」の記事に目を止められ、電話による照会を受けたのが事の始まりであった。中国考古学が専門と言われる林先生が(以下、先生と呼ばせていただく)、どのような意味で「かさ」に関心をお持ちなのかは聞きしたものの、自然科学の範囲でしか考えることができない筆者には、はなはだ漠然としていて雲をつかむような思いであった。しかし、電話の迫力に満ちた響きは、只事ではないことを直感させた。御要望に沿うような資料を2~3点提供させていただくことになった。その中の一つが、Greenler (1980)の“Rainbows, Halos and Glories”である。

そして10ヵ月後、刊行された論文を頂戴して、震度7クラスの強い衝撃を受けた。そこには「かさ」に関係する中国古代の信仰と神話的な図像が、現代科学が解き明かしたGreenlerの解説や図版を介して見事に論考されていた。古代史のなかの「かさ現象」をここまで精緻に考察した研究者がいたであろうか。いないに違いない。さらにはまた、Greenlerの本が10年前に刊行されていたのなら、先生のお仕事もこれほど体系的には整理できなかったかも知れないと感じた。自然現象と古代思想や古代美術が素朴なスタイルで見事に結びついている事例に新鮮な感動を覚えたとともに、Greenlerを自ら読み解かれて、長年にわたって蓄積されたに違いない貴重な資料に光明をあてられた先生の探求心に魅せられてしまった。古気候学の分野ならば想像できるとしても、ほとんど無縁のようにみえる気象学と考古学がかくも美しく結びつくとは、驚きであると同時に愉快でもある。

この論文のなかで筆者が特に感銘をうけた部分を2か所だけ紹介したい。ただし、門外漢の筆者の筆では正確な欠くおそれがある。幸い、先生の御快諾をいただいたので、以下に、原文のまま紹介させていただくことにする。なお、原文は旧仮名遣いであるが、ここでは新仮名遣いとし、カッコ内に筆者の注釈を加えた。

最後に、本稿をカラーページとしてお引き立て下された編集委員会と写真提供者に深甚なる謝意を表します。

(1) 中国の東と西の遙か遠い所に扶桑、若木と呼ばれる恐ろしく高い柱状の木があって、その先端には蓮の花のような光り輝く花があった。そしてそれを伝って日が天に昇り、また天から降った、と考えられていたことが知られた。これは西暦紀元前1千年紀の晩い時期から紀元後2~3百年の頃に今の形をとった文献の中の資料であるが、この木はそれより千年ほど遡る時期の三星堆(四川省の遺跡)の細長い柱状の幹の上に大きな花をつけた「神樹」そのものである。形に小異のあるものが2本出ている。或いは夫々東と西の若木に当ると考えることもできよう。さて、このように三星堆の神樹が後世の記

録にのこる若木と同じ性格の木だということが証明できた、ということ位は別にどうということもない。これについて筆をとったのは、そのような木は何と神話の世界に留らず、運がよければ現代の我々も目で見ることができると驚きを伝えたいためである。図(省略)は太陽の暈の一種である太陽柱の写真である。日の上下に光の柱が立ち、日の昇るにつれ柱も昇る。日は太陽柱を伝って昇る。(中略)地平線近くで太陽柱が現れ、それに沿って太陽が天に昇り、またそれに沿って沈むのを見て、古人が恐ろしく高い赤色の木の幹が東西の遙か遠くの世界の果にあり、それを伝って日が昇り、降ると考えたのは全くもつともなことである。

(2) 太陽の暈の写真とか、現れ方の図を見ていて、他に中国古代の神話的図像がこれで説明できるはずだ、と気付いたことを若干付け加えておきたい。第1は以前にも引いた河姆渡文化(西暦紀元前5千年ごろ)の日月の図で(論文中では図25, 26; ここでは第1図)、左右から鳥が日や月を挟む図像である。天上で鳥が日や月を運ぶ図としか考え様がないが、疑問に思われるのは、このような形では鳥は飛べないどころか、地上で動くこともできない、ということである。第一、2羽が一緒に運ぶ必要はない。本当に鳥が日や月を空中で運ぼうというのなら、例えば漢代画像石にあるように、1羽が背中か胸に密着させて、翼が自由に動かせるような形をとらせるべきではないか。空を運行するというで鳥に結びつけられたのは理解できる。それがこのような形に画かれるについては、幻日、幻月が鳥の頭に見られたからに相違ないのである。(中略)これらは鳥が物を空中に運ぶには不適当な姿勢ではあるが、実際に見えるのがこのようになっているのであるから、これは理屈ではない。仕方がなかったのである。ここで興味深いことは次のことである。すなわち図25で上端接弧に由来すると考えた上辺の火炎形、下端接弧に由来すると考えた鳥の足等は、中にある円の外に接していることである。右の筆者の考えが正しいとすると、それらの量の接するのは日そのものではなく、その外、視半径22°の所をとり巻く内量であるから、図25の円盤は日ではなく、その内量象つたもの、ということになる。日そのものはそうするとその中心にある小さな円ということになる。だからこそ、図25で右図の円の内側に鋸歯紋が入れられ、中心の小円の太陽からの強い光線の輝きが内量の内側にあるのである。

参 考 文 献

- 1) 浅野正二, 1988: 紹介: 根室で観察されたハロー現象, 天気, 35, 326-328.
- 2) 荒生公雄, 1985: 気候学・気象学辞典, 二宮書店, 76.
- 3) Greenler, R., 1980: Rainbows, Halos and Glories, Cambridge University Press, pp. 195.
- 4) 林巳奈夫, 1991: 中国古代における日の量と神話的図像, 史林(京都大学文学部内, 史学研究会発行), 第74巻, 第4号, 96-121.
- 5) 増田善信, 1989: 異常量(ハロー)も空からの手紙, 天気, 36, 39および54.

*An archaeological study on the ancient Chinese mythical images of halo by Dr. Minao Hayashi.

**Kimio Arai, 長崎大学教育学部地学教室.